



JUDI

077

20.MARCH
2004

特集 四国のまちなみ・ひとなみ

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集:四国のまちなみ・ひとなみ	1
1. 卷頭言	2
2. 四国小紀行での議論	3
3. 四国の山とまちをつなぐシステムづくり	5
4. 城川茶道考	6
5. 徳島の農村舞台	8
6. 木屋旅館の保存	9
7. 四国くレト・フューチャー・ティ化構想	10
8. 過疎集落におけるまちなみ保存と現実	13
9. 四国再発見ツアーから四国ブロックの 前望を	14
●第14期定期総会告	16
●研修研究委員会報告	18
●国際委員会報告	19
●事務局より	20

特集・四国のまちなみ・ひとなみ

今回の特集キャラバンは、前後に高速道路を利用し、かなり円滑な長距離移動ができた。

しかし四国には約1200kmのお遍路道も存在している。街並みや地域デザインも他所よりも濃い同時性を有しているように受けられる・・・。(編集委員 櫻井 淳、伊藤 光造)

卷頭言

櫻井 淳

JUN SAKURAI

広報・出版委員

(株)櫻井淳計画工房

「四国」は都市化する中で時代に残されたような空間がここかしこにある。お遍路さんが行きかい、空海の残像は今でも生きているような、靈場の佇まいが見え隠れする。司馬遼太郎が好んで投宿し、原稿を書いた宇和島の木屋旅館は、そんな雰囲気が漂う。城川町の「茶堂」(ちゃどう)も立地といい不思議な空間である。もてなしの空間か憩いの空間か議論もあるが、集落の出入り口に立つ姿は美しい。

JUDIの広報キャラバン隊は、四国ブロックが毎年行っている「四国発見ツアー」に便乗した。徳島の島博司氏がこのツアーを「都市化する時代の影に残像のように残された空間を求めて」と位置づけている。確かに島々を含めて四国は多様で、四国のメンバーでさえも全てを見ることはかなわないと言う。歴史的街並みの保全と「町並みから村並みへ」で名高い愛媛県内子の町役場に集合した四国ブロックのメンバーは学生を含めて16名、多士済々のメンバーであり、都市計画プランナー、建築家、大学教師等、様々な問題意識を持った人々とのツアーは様々な人並みとの意見交換の場であった。ツア一直前に内子の岡田文淑氏から、内子の街並みに全国版のお土産屋が出店し、内子の観光地化が進行する近年の現実問題を聞いた。街並みの保全と活性化の取り組みの先達者である内子ですら様々な課題を抱えている。

ツアーは、内子町から肘川沿いに城川町へ、茶堂の見学と郷土史家の平岡先生に茶堂の話を拝聴し、城川町に宿泊、ここでも保存したい空間と現実の生活空間が話題になった。翌日、城川町山の上にある三滝神社のハッ鹿踊りを見学した。宇和島は仙台の伊達家であり東北地方の鹿踊りに似ており、牛の踊りは「もののけ姫」のアニメの世界に似た不思議なものであった。城川町から宇和島市へ、宇和島の街並みと木屋旅館等を見学。食事をしながら、ワークショップを行った。ワークショップの議論が、今回の特集「四国のまちなみひとなみ」の内容になった。

●テーマー1「地域の環境と暮らしの再生にできることはなにか」

城川町の「茶堂」について、残される茶堂屋根の材質が茅葺きからトタン屋根等への変質が、過疎化する集落でメンテナンスが容易な材料に変えられてゆく現実が見える。素材の調達の課題や技術が継承できない等解決策として、例えば茅葺きは形だけでなく暮らしの仕組みにできるか。

●テーマー2「山と街をつなぐ仕組みをつくる」

大西さん達が活動している、木と家の会は、四国の山の木で家をつくる活動を通して、森林経営や木材の品質管理まちづくり

等、様々な課題解決を図っている。

●テーマー 3「保存と保存した建物の使い方」

これは、内子でも問題になっている伝建地区の建物の活用方法であり、四国では保全すべき建物はまだ沢山あるが、どう活用するかが見えない。徳島に残る農村舞台、宇和島の木屋旅館等である。四国ブロックの会員はそれぞれの地域で、環境や施設等の保存活動やN P O的活動が活発で

ある。保存した建物の活用等、どう保存させるか等多くの課題を語り合った。高知の島崎さんからの指摘は、過疎地では保存されたのではなく、取り残されただけが現実です。

四国の山並みの景観はやさしく、人並みもやさしい。課題は関東でも同じ様であるが、時間もゆっくりとやさしく流れている。しかし着実に活動を積み重ねているようと思える。

伊藤 光造
KOUZOU ITO
広報・出版委員
備地城まちづくり研究所

四国はある意味一つの宇宙をなしている。全体は近年整備の進んだ高速道路で結ばれ、また古くからお遍路道でネットワークされている。そしてそれぞれの地域に文化の惑星系がある。今回の四国行は四国独特の地域的つながりと各地域に重層化して存続する環境文化の粹の一端に各所で触ることができ、大変新鮮であった。

合計3泊3日、JUDI四国支部のメンバーと幾つかの場所を体験しつつ、そこここで議論を重ねつつ回った濃密な時間・空間であった。既に内子や脇町など街並保全では全国区で著名となったところもあるが、それは一部で、他にも資産は沢山あるようである。しかも時間的な切り口からは、弘法太師や、江戸期の藩体制、幕末、明治から大正・昭和初期、あるいはこれらの通奏低音としての巡礼文化に出会える。地域的な切り口からは、宇和島藩、伊予松山

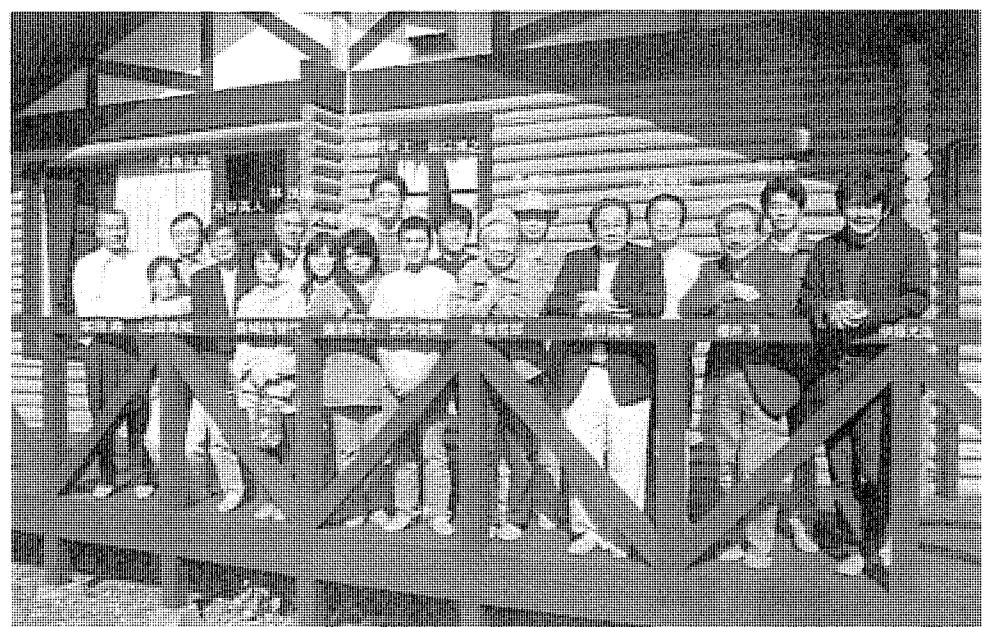
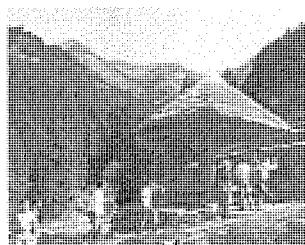
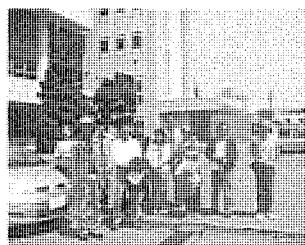
藩、高松藩、徳島藩、土佐藩など江戸期の国が感じられる。そしてこれらと縦横に絡む司馬遼太郎の物語と足跡がある。

JUDI四国支部の会員は、それぞれの地域で、それぞれの立場から、地域のデザインに取り組んでおられる。今その相互の糸はそれほど太くないかもしれない。しかしこの空間、この集積、メンバーの雰囲気、それらはこの継続から、真に地に足のついた、確かなデザインが立ち上がってくるのではないかという期待をもたせるに十分である。

ここでは今回的小紀行で見聞・議論した一端を紹介する。

●4月17日 午前11時 内子町芳賀邸横の路上にて

5年ぶりくらいに見た内子の街並は、周辺の環境整備も含め、到達形に近づいてい



ると感じつつ、今回アレンジをして頂いた島さんの紹介で内子町街並み保全センターの内田氏にあう。しかしどうもそうではないようだ。路上の立ち話にも係わらず、しかも役場時代からもう長いこと係わっている街並み保全について、熱い想いを力強い言葉に秘めた氏の話を聞く。内子は今、ある意味岐路にたっている、観光か地域文化か、改めて街並み保全の意味を問い合わせなければいけないといわれる。

別れたあとで思うのだが、そう、この人、こういう人がいたからこそ、街並が今現在までたどり着いているのだ、という感をあらためて深くする。

●4月17日 午後 昼食後西予市城川町三滝神社祭礼見学後、城川ギャラリーでかまぼこ板アートを見る

カマボコ板アート展はもう10回目を迎えるという。これはたいそう面白かった。ここを設計をした本田氏の話では、全国から応募があり、ますますコレクションが充実しているという。ギャラリー、といつても立派な美術館であるが、これをカマボコ板

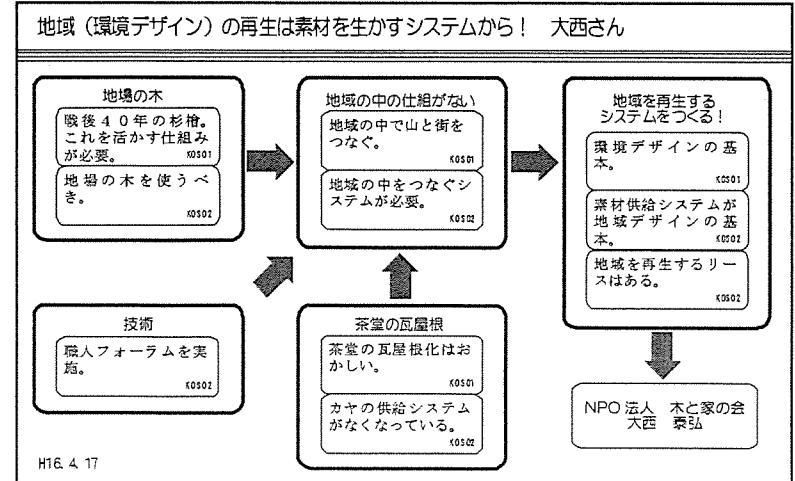
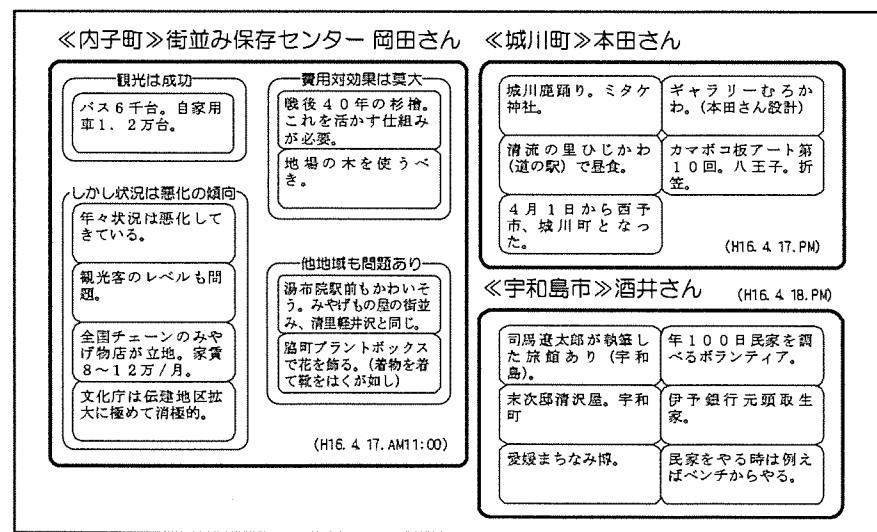
アートで埋め尽くしたらいいと思う。現にそうなってきている。

●4月17日 夜、城川ロッジにて地元郷土史家西岡氏より茶堂の講話を聞く

茶堂、それは集落の入り口などにぽこっと建つ不思議な小堂である。はつきりとしたことはわからないと控えめにおっしゃる。しかし地域に暮らす人の心の、開放的なホスピタリティを示していることは明らかである。

●4月17日 深夜 懇親会にて 讲岐・大西氏との座談

講話のあとは飲み会となった。しかしこここの議論が時に核心に触れることがある。その一つ。講岐の大西氏は、地域のデザインにまず素材から迫るという、確かなアプローチをされている。技術やデザインの前に先ず素材だろう！ 正論である。素材が無くては話は始まらない。NPOをつくり実践も始めておられる。まず足元から考える、その姿勢に感服し、酒を飲みつつ記録をとってしまった。



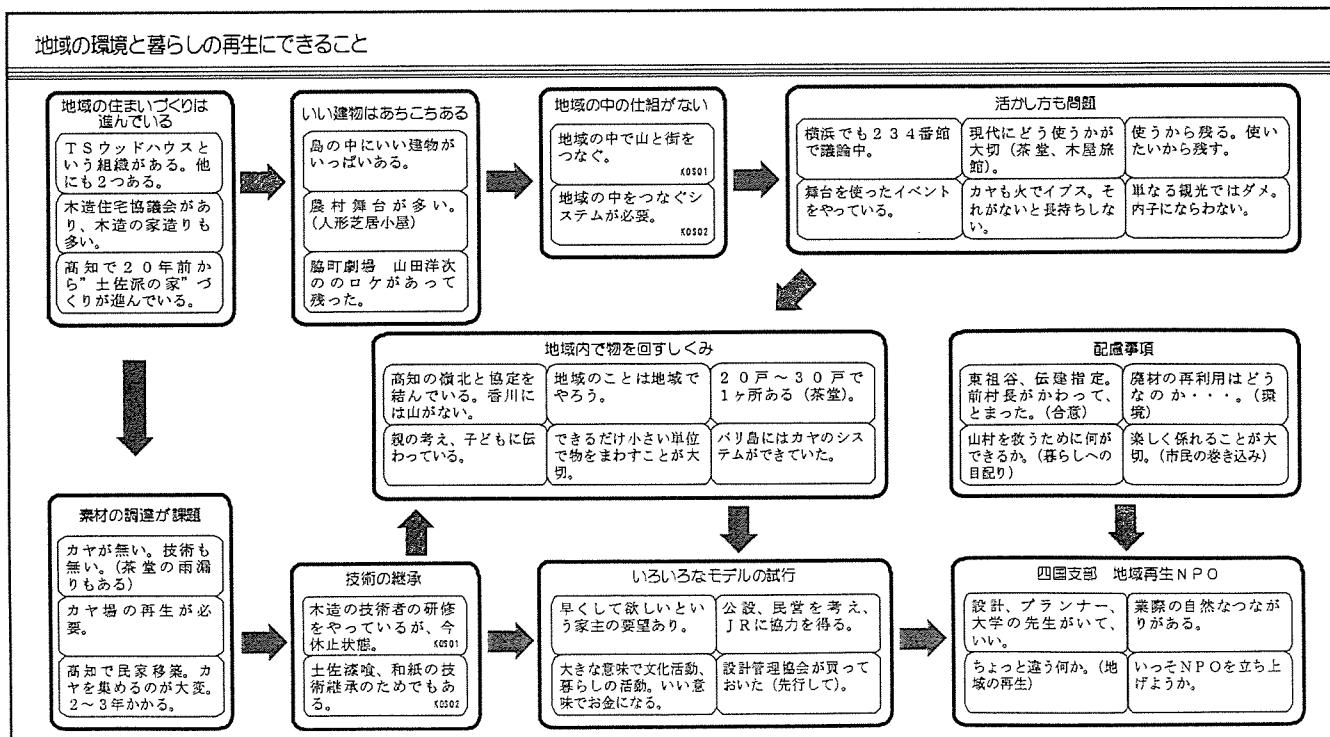
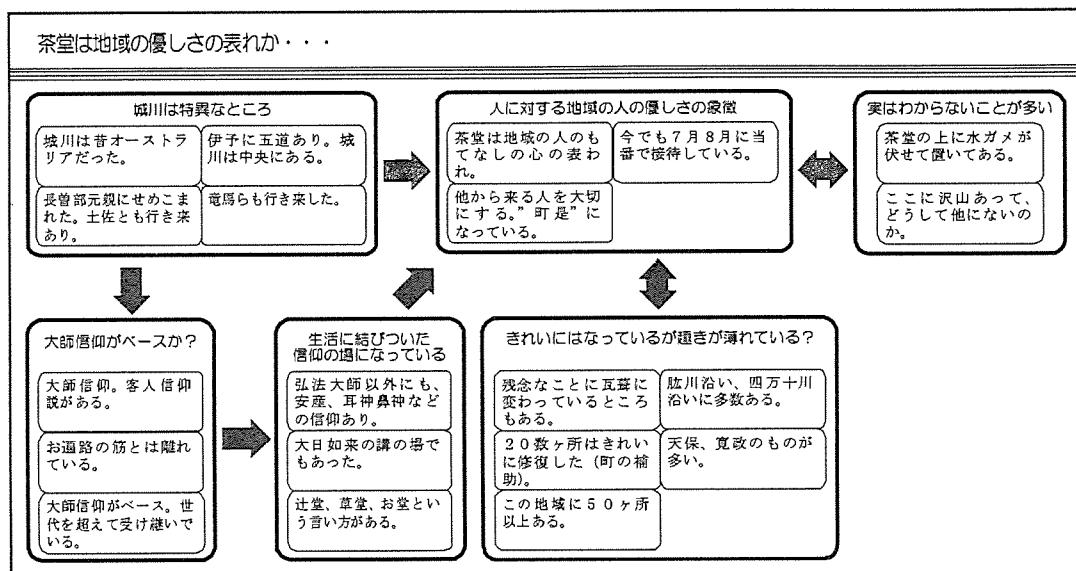
●4月18日 宇和島市木屋旅館見学後、近くのレストランにて食事

街の中心部にあり、司馬遼太郎が好んで滞在した木屋旅館を、ご高齢のご主人の案内で見せて頂いた。地元の酒井氏のお話では、今この旅館の保存がなるかどうか微妙な段階にあるという。氏は年に百日は民家調査などのボランティアをしているとのこと。そのあと地場料理を頂いた。

その際の議論の到達点は、JUDI四国支部をNPO化したらどうかということだった。議論の流れから私がいいうまでもなく、島氏（実は伊藤の昔からの仕事仲間、いまや有名な徳島のNPO、新町川を守る会の事務局長的役割を果たしている）も既に

そのことは考えていたようで、すぐに呼応する意見がでた。それぞれの地域で個々に進む動きを元気づけ、関連づけることが、今重要である。よそからまたま見た私もそのことが感じられた。個々の地域の惑星系が光を増し、四国宇宙が輝きだす、そんな姿を見てみたい。それは今こそこの議論から、始まるのかもしれないと思った。

四国のこの動きは、JUDIの地域支部活動のモデルの一つとなる、と思う。地域の資産との関わり、個々の人・活動相互の関わり、その要となる機能やプラットフォームあるいは応援団が全国各地で必要とされていると考えられるからである。



四国の山とまちをつなぐシステムづくり

大西 泰弘

YASUHIRO OONISHI

NPO法人

木と家の会

(<http://www.kitoie.or.jp>)

1. 城川町の茶堂が変わりつつある

「修繕や新築で金属屋根や瓦葺きになった最近の茶堂は茶堂らしくない。カヤやワラが手に入り難くなっているからだろう」と、茶堂見学の事前説明で地元郷土史家の方からお話を聞いていましたので、翌日の見学会では最近改修や新築された茶堂を見ることになりました。

屋根を修繕したものが2件と新築1件です。

屋根が修繕された茶堂の一つは、最近、地元の方々によってワラ屋根が葺き替えられたものです。細部の仕上げは荒いのですが遠目には昔からのものと変わりなく見えます。一間半四方ほどの広さで、井形に組まれた梁桁から下の構造はそのまま使われていました。

もう一つは屋根が金属板に葺き替えられたものでした。屋根勾配は約10対3で最近の家のシルエットと似通っているため、道路に面して建っているのですが、案内がなければ見過ごしてしまいそうでした。

新築の茶堂は二間四方くらいの広さで瓦葺きです。最近の住宅によく似た印象で、公園の休憩所のようでした。

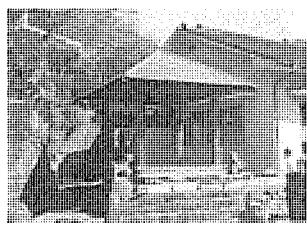
すべて方形造りで木を組んで作られていますが、屋根は「ワラ」「金属板」「瓦」がその材料なりの仕様で普通に施工されたものです。屋根材料にカヤが使われなくなり茅場はすでにならないそうです。中山間地の豊かな自然の中に建つ茶堂は茅葺きが一番似合っていると思いますが、城川町の人たち

の「もてなしの心」が茶堂を残しても、茅葺き屋根を維持するためのシステムは無くなり茶堂を昔のままの姿で残すことは困難になってきています。

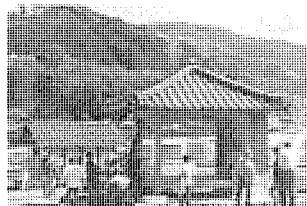
2. フォーラム「やま・むら・まちをつなぐもの」

JUDI四国ブロックでは、平成8年度より四国固有の風土に焦点をあて、平成9年に徳島県池田町で開催した「四国のデザイン／池田フォーラム」以降、四国の自然に養われ、その地域で醸成されたデザイン、他の地域にない魅力を探し出そうと四国4県の様々なまちで見学交流会を開催してきました。そこで話題はどのようにして固有の地域らしさを守り育てていくかでした。

身の回りのデザインは社会のシステムにより支えられているものであり、それを構成する素材のことをよく知ることから始めてみようということで、平成11年、家づくりに欠かせない木材をテーマにフォーラムを開催しました。テーマは「やま・むら・まちをつなぐもの／環境デザインを支えるシステム」でした。林業関係の啓発活動と持続する木造建築の生産システムの取り組みの紹介でした。これをきっかけに、林業と連携する住宅生産システムづくりをより具体的に実践するための任意グループ「木と家の会」を立ち上げ、平成14年にNPO法人化しました。会の目的は「四国の山に育つ木をまちに受け渡すしきみを再構築する



金属板葺きになった茶堂



新築された瓦葺の茶堂



ワラ屋根が葺き替えられた茶堂

ことにより、住まいづくりを通して、相互の交流と経済循環を活発にし、森林の保全とともに循環型社会の構築に寄与すること」です。

3. 四国の山の木で家を建てよう

木と家の会は、設立の年に香川県の水源地である高知県の嶺北地区の林業家グループと協定を結びました。協定は、持続可能な森林経営と良質な住まいづくりを推進するために、家づくりに使う木材とその木材を産出する森林の取り扱いについて定めたものです。今後適正に管理される森林は協定森林として指定しました。そして、山とまちが共通に使える規格となる木材の標準寸法を定めました。これまで数回のケース

スタディを行いながら、それらのデータをもとに定期的に両者の課題を解決するための運営協議会を重ねてきました。その結果、木材の品質や価格、受け渡しの方法、製材・流通・設計・施工等の役割分担などについての具体的な取り決めが整理されつつあります。

そして現在、普及のための家づくりを検討しています。木材の品質管理、伝統構法を基礎とした構法の整理、家の維持管理や増改築への提案、コストの明確化等に加えて消費者への暮らしの提案をするものです。またそれは近年の住宅の孤立化により放置されがちな屋外空間を改善し、良好なまち並み形成を図ろうとするものです。

城川茶堂考

高倉 哲郎

TETSURO TAKAKURA

城川町は国道197号線を大洲より南東から流れ込む肱川添に三、四十分も車で走ればその中央に着く。なだらかな丘陵地帯で耕地も多い。しかし周囲の町境は険しい山に囲まれ、さらに東へ越えるとそこは高知県の権原に接している。

権原といえば権原街道。土佐より坂本龍馬、脱藩の道である。権原より高研山の屋根を越え日吉村に入り、広見を抜け、土佐

街道を通って宇和島の城下につながっている。

しかし当時、訳ありの旅人は本街道を避けたのではないだろうか。日吉村を通る街道は城川の境に連なる山並のすぐ下を平行に走る。両側から急峻な山が迫る深い谷、日向谷の底の一本道が一直線に続く。脇道が全く無く追われれば、他に逃げようがない。村はずれに来てやっと城川に入る道と



茶室 (スケッチ)

18. スケッチ1 茶堂



スケッチ2 安尾の茶堂

全く人里から離れた畠でもさびしいところにある。こんな所で旅人を接待したとは、とうてい考えられない。



スケッチ3 三瀧神社の八鹿踊り

伊達と共に奥羽からきた踊り。鹿の頭を付け、太鼓を打ちながら踊る。アイヌの自然崇拜の祭事から取入れたと思われるが、浄土宗の念佛踊りと見られる。

交差する。その地の名が出口とついている程である。広見に入り、それを抜ける道も、また、宇和島に至る土佐街道もやはり谷筋の一本道である。

其の点、橋原から九十九曲りの峠の杣道を搔き分けて越える城川への道は、きついが入ってしまえば平らで脇道も多くどこへでも紛れ込まれる。

野村を経て、吉田または宇和へ、五十崎、内子を経て伊予にも出れる。最も早いのは頃合を見計らって肱川から舟に乗れば一気に長浜まで下ることができる。いろいろと都合のある旅人には城川を抜ける道は真に好都合の道になったであろうから、結構通って行ったのではないだろうか。

夕暮のことを、たそがれ時、古くは、かはたれ時と云う。誰ぞ彼は、彼は誰ぞ、が語源だが、だんだん暗くなって向こうからやって来るものが、顔も格好も解らなくなってくる。いったい誰なんだ。非常に不安になる。人かそれとも・・・。ほんの少し昔まで人々は、夜の暗がりを歩いているのは妖怪や魑魅魍魎、化物、等、ムソグル斯基のはげ山の一夜の様に思っていた。でも本当に恐いのは今も昔も変わらない人間である。訳あって夜の道を怯えながら歩かなければならない人は村はずれの地蔵や、辻堂、稻荷等にどれ程心を救われたであろうか。

城川には茶堂と呼ばれるお堂が集中し、往時は60棟を越えていたという。茶堂は四国遍路の巡礼の為に用意されたと云われているが城川は全くその道には関係が無く、また他県にあるものも大方それとは関係の無い所に建っているものが多い。

一間四方の板の間、屋根は茅葺き、三方吹きさらしで、一方には祭壇を設け弘法大師、地蔵、大日、薬師、観音、釈迦、阿弥陀、等、諸仏が祭られているが、確かに接待や休憩するにはあまりにも風通しがよすぎる。祭壇の下まで壁を抜き見通せるようになったものが多い。お堂そのものにあやしいものが留まらぬ配慮なのか。昼間の茶堂は旅人の接待の場となり村人達の憩いの場となっている。しかし七月に限られた当番の接待は、盂蘭盆会であるし、また歴史の中で非業の死をとげた者への鎮魂のものもある。神仏を身近に祭り、すがり、それ等の靈をなぐさめ、まずは自分達村人に災いが来ない様に、農作物が豊かに実り、子孫が繁栄することを単純に願ったものではないだろうか。

時代と共にその想っている価値が薄れ、堂の存続も難しくなってきていたが、近年は古い物への郷愁、地域交流の場として再び見直されて整備されているのは、好ましい限りである。

徳島の農村舞台

林 茂樹

SHIGEKI HAYASHI

林建築事務所

日本の町や村には必ずと言っていいほど神社があり、その境内には神への奉納のための音曲や舞を演じるための施設を持つものも多い。特に町の文化的脈わいから離れた農山漁村においては奉納の名の下に楽しむ唯一の娯楽であったものと思われる。そこで演じられる内容も時代と共に中世には能、近世には歌舞伎や人形浄瑠璃と変遷してきた。しかし、第二次大戦後の高度成長と共に映画やテレビの発達の影響と地方の過疎化もあって上演の機会もなくなり、忘れ去られたように朽ち果てようとしている。

昭和47年の角田一郎氏等の全国調査により、ここ徳島県は全国一の農村舞台を持つことが判明、それも人形芝居のための舞台であることが大きな特徴である。これは当時阿波藩であった淡路島で人形芝居が発祥した事によるものであろう。その後平成4年には徳島県建築士会阿波のまちなみ研究会による悉皆調査(私も調査の一員であった)の資料を写真と共に報告書にまとめた「阿波の農村舞台」が発刊されているので一番の参考資料となっている。

これによると305件を調査、134棟の現存を確認。しかしながら舞台としての機能を残していたのは約30棟で他は倉庫や集会所などへ転用されている。分布を見ると県北部の吉野川流域には少なく、ほとんどが南部の勝浦川、桑野川、那賀川、海部川流域に集中して存在する。農村舞台は県南部の

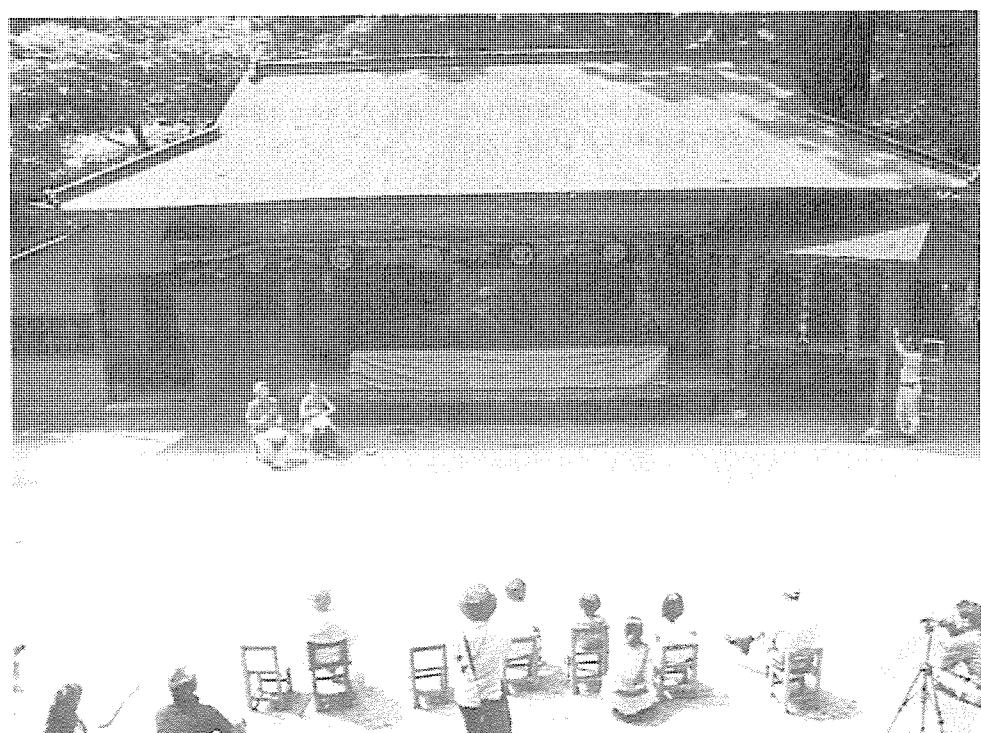
文化と言っても過言でないであろう。

人形浄瑠璃は県下各地で盛んに上演されていたが、吉野川流域に常設舞台が少ない理由として交通の便の良さが挙げられる。淡路から来た名のある人形座が興業として掛け小屋を建て木戸賃を取って営業していた。しかし県南部の漁村や山間僻地の集落までは人形座も来ないので、地元民が自ら舞台を建て人形を操り浄瑠璃を語って神へ奉納していたのである。舞台は集落ごとで競い合うように村単位でなく神社のある字単位で建てられた。舞台は規模も構造も多種多様であるが、地元の方々が資材、労力を出し合って造ったため素朴で簡素なものが多く、普段は一見すると倉庫に見間違うような造りであるものが多い。

舞台は人形芝居を演ずるための建築的特徴を多く持っているので挙げてみよう。その一つは基本的に舞台に向かって右側に三味線弾きと浄瑠璃語りが座る太夫座を持っていることであろう。太夫座は舞台より一段高く斜め前方に突き出しているのが一般的で、舞台の演者と客席双方を見ながら演奏するためであろう。また、前面開口部及び両妻から1間ほど入ったところに柱のある舞台が50ヶ所近くあったが、大臣柱と呼ばれるもので、構造的に必要なものではなく、舞台背景の襖立て込み用の敷鴨居取り付けや本手の手摺り取り付けの役目のために考えられる。そのほか一般に舞台場面転換装置として歌舞伎では廻り舞台がある



今年の公演案内チラシ

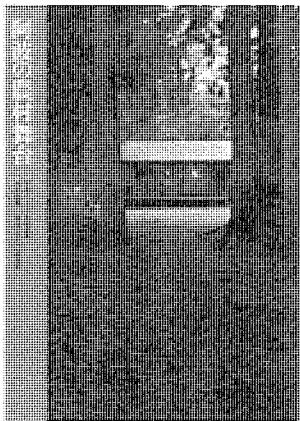


拝宮の舞台見学会におけるミニ公演

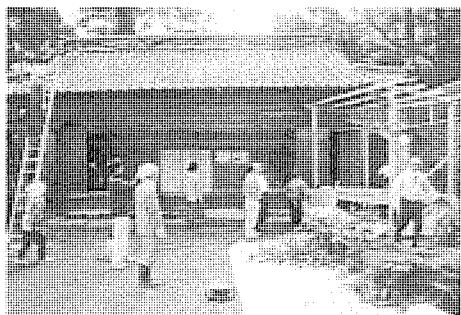
が、ここには襖カラクリがある。これは何重もの敷鴨居に取り付けた襖を引き抜くなごして舞台背景を転換する機構で、芝居とは独立してカラクリ自体を見せ物とし、徳島市の犬飼の舞台では「千疊敷」として、引き分け、行き違い、チドリ、回転、上昇など巧妙な42景の変化を楽しませてくれる。

農村舞台での人形芝居の公演は重文指定の徳島市犬飼舞台と木沢村坂州舞台の2ヶ所で年一度開催されていたが、平成3年に上那賀町川俣の舞台が40年ぶりに復活公演を開催したのを始め、「阿波の農村舞台」出版も契機となり、少しずつ農村舞台が見直されて各地の舞台での復活公演も開催できるようになってきた。昨年5月には農村舞

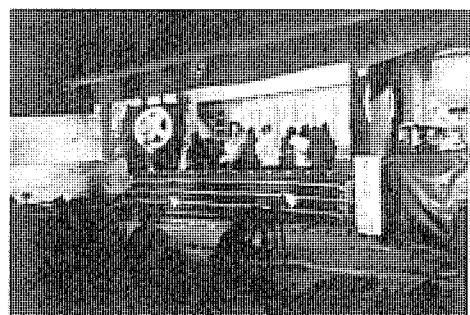
台の保存・活用を主な目的に民俗学研究者や建築関係、デザイナーなど広い分野の方々で「阿波農村舞台の会」を設立し、農村舞台の見学会や勝浦町今山の舞台、神山町小野さくら野舞台、三好町法市の舞台などの公演の支援を行ってきてています。しかしながら農村舞台のある地域というのは過疎化が進んだため残されたという理由もあり、住民の高齢化もあり舞台を支えるべき人材の確保が大きな課題となっている。しかし、復活公演を見学に里帰りして「故郷のすばらしさを再認識した」という若者や家族連れの言葉から、失われたコミュニティーの回復に農村舞台が一役買ってくれるのでとの期待を持たせてくる。



阿波の農村舞台



法市の舞台公演準備



今山の舞台における公演

木屋旅館の保存

酒井 純孝
JYUNKOU SAKAI



酒井氏（右）と本田氏（左）

宇和島市は松山からは約100km、JR予讃線では1時間20分の距離にあります。宇和島市の西には宇和海を面しそれ以外の面はけわしい山地に囲まれて南東には、千メートルを越える鬼ヶ城の連山があり、滑床渓谷をはじめとする美しい渓谷がある。

西の宇和海海岸は入り江と半島が複雑にあり、典型的なリアス式海岸で変化に富み風光明媚なところで知られている。そのような地形に市街地は城山を中心に形成されている地域です。

宇和島市は古くから板島郷と呼ばれて、文禄4年(1595)藤堂高虎が宇和郷7万石の領主となり、丸串城を改築し本格的な城下町として形を整えたといわれています。

慶長19年(1614)仙台藩伊達政宗の長庶子、伊達秀宗が宇和郡10万石を拝領してから、宇和島城を中心に産業、教育、文化の振興に力を入れ発展し、明治4年廃藩置県が行われてからは、宇和島県とよばれ東西南、北宇和郡、喜多郡の行政の中心役割を

今まで果たしている。

宇和島城の南に堀端通りがあり、明治、大正、昭和、平成と商店として現在も数軒の店舗が残っているが、老舗が時代と共に閉店をしいる厳しい状況にある。

その数軒の建物の中に、明治創業から旅館を続けた、木屋旅館の建物が残っている。

木屋旅館は、その時代々を乗り越えて沢山のお客様が食事をし、体をいやし、宇和島を起点にして関西、九州、中国地方、四国は松山、高知へと旅立ち宿場まちとしてにぎわった宿でしたと棟主平川さんは言う。そのような歴史のある旅館に日本が生んだ代表的作家司馬遼太郎が取材の時宿泊した旅館である。特に宇和島の人々の優しさを大切にしてくださって、何人ものお手伝いさんを雇用しあ嫁さんに出して下さった事など、宇和島については司馬遼太郎の世界、街道をゆく、など色々な本に出ている。司馬遼太郎がそんなに好きであった宇

和島、そしてしばしば泊まった木屋旅館の建物を保存をしたい。

これという特徴はない。しかし創建当時の風情を保ち、木造在来工法、木造2階建て、和瓦葺き、切り妻屋根、間口10.50間、奥行き5.50間、総2階の建物です。

又旅館の近くに鮮魚店があり、その場所にもよく行って宇和島の人々と酒を酌み交わした所もある。

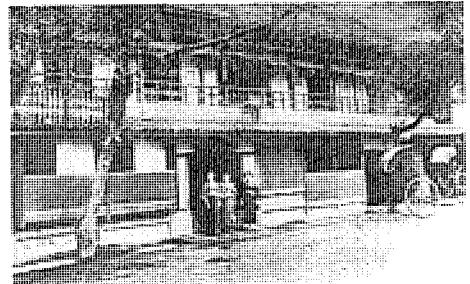
そのような場所がまちの一部に存在し、現代風の看板を撤去し明治の時代もしくは、大正時代に景観修復をすればまちの中心に観光や、買い物の休憩場所など宇和島に必要な拠点となると想う。又木屋旅館を中心に東方向の山際に行けば伊達家菩提寺など寺町の散策ができ西に下れば、伊達博物館、天赦園、和靈神社など歴史の散策も



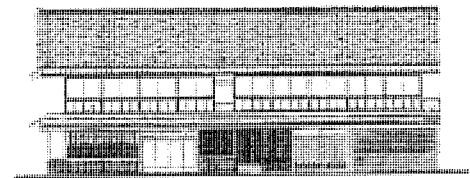
現在の木屋旅館

見学が出来る。

このような「歴史と文化のまちづくり」をテーマと決め、市民と行政が一体化した委員会が発足し1年間木屋旅館の利用と保存に議論を重ね、宇和島市長に答申した。現在は一步中に踏み込み詳細が検討されているが後一步進まない。色々難しい事があるが宇和島市民の宝が消されないよう、市民運動を少しづつではあるが展開していきたい。今回都市景観デザイン会議の方々に、宇和島城を中心として宇和島の周囲を見ていただき、木屋旅館を見学して、郷土料理など食して戴き色々ご意見を戴きました。貴重なご意見は又委員会などに提出し保存と景観の復元に進んで行きたいと想っております。遠路宇和島まで来ていただきました。



明治期の木屋旅館



立面図(建築士会宇和島支部まちづくり委員会)

四国《レトロ・フューチャー・シティ》化構想

大谷 英人
HIDETO OOTANI
高知工科大学

●『まち』は空間的かつ時間的存在である

昔、NHKテレビで司馬遼太郎の『街道をゆく』という番組があった。その番組の冒頭で「街道は空間的存在であるが、時間的存在でもある。街道は過去という膨大な歴史を持っている」というナレーションが流された。

この『街道』という言葉のところを、『都市』あるいは『まち』という言葉に置き換えて、この文章は成立する。

まさに、『まち』は「空間的存在であるが、時間的存在でもある」。『まち』は、「過去という膨大な歴史を持っている」ということができる。

●歴史は地域の人びとの思想や感情の中にある

ヘーゲルは、「歴史とは時代精神の産物である」という。その時代精神を日本人は、「時の流れ」とか、「時の勢い」とか言う。「時の流れ」にさからうもの、「時の勢い」に反するものは、到底、歴史において勝ち目はない。

しかし、時代精神の大まかな展望のみでは、歴史はとらえられない。歴史は、指導者ばかりによってつくられるものではない。その歴史の中で生きてきた人々の生々しい思想や感情が、歴史には隠されている。

●「空間の履歴」は豊かさを創り出す

私たちの住む空間(場所)の豊かさは、空間の歴史性、すなわち「空間の履歴」に、おおいに依存する。逆に言えば「空間の履歴」は、私たちの住む《まち》の豊かさをつくりだすベースであるとも言える。

したがって、地域にとって豊かな履歴をもつ空間(場所)は、「かけがえのないもの」である。

●四国は戦災にあわなかつた都市も多い

日本の都市の中で、戦災にあわなかつた《まち》として京都・奈良は有名であるが、他にどのような《まち》があるのか、無知で多くを知らないが、全国的には、そんなに多くないように思われる。そうした中で、四国は、戦災にあわなかつた《まち》が多い。今回、見学した宇和島市や内子町、城川町等も、その事例に該当する。

戦災にあった日本の多くの《まち》は、戦災復興土地区画整理事業等により、それまであった空間から一変した。それに引き換え、ヨーロッパの都市の戦災復興では、第二次大戦で破壊される前の都市の姿に復元した話は有名である。

●《レトロ・フューチャー》への期待

地球規模での環境破壊、そして、石油づけの生活、等々と、それらを前提とした未来都市。私たちは、これまで聞かされてきた近代科学を前提とした未来都市に対して、大きな不安を感じている。

そんな状況下で、最近『レトロ・フューチャー』という言葉が聞かれる。これは「なつかしい未来」という意味で使われるが、この頃、この言葉が私には妙にしつくりとくる。レトロといつても、決して「懐古趣味」ではなく、フューチャーは、モダニズ

ムを超えた人間的な未来を構築することである。

●地道な「地域再生」への取り組み

昨今、国は「都市再生」施策に続き「地域再生」施策の展開を図ろうとしている。確かに「地域再生」という言葉は魅力的である。しかし、それが「都市再生」という美名に隠れ、東京で実施された高層ビル建設ラッシュのような「質」のものであるなら、願い下げである。

「地域再生」は、「地の人」が中心となつた地道なものでありたい。また、「地域再生」の字義を考えれば「地域を再びよみがえらせる」ことであるから、よみがえらすべき前史があることになる。

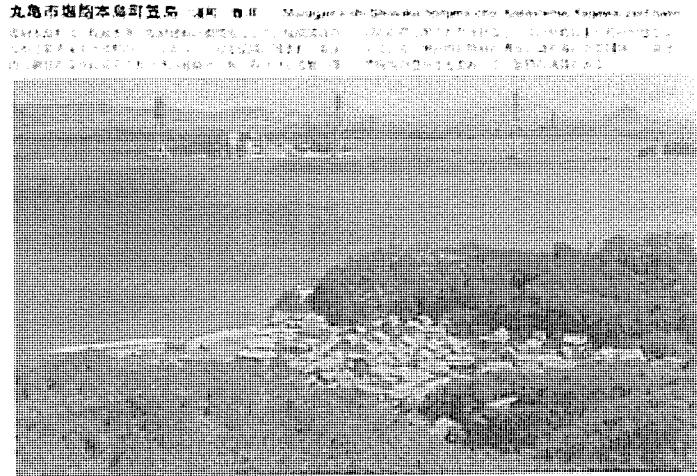
したがって、地域において、「前史のある」《コト》、《モノ》、《空間》等の再生とは何なのかを見極める必要がある。

●四国を《レトロ・フューチャー・シティ》に

先に私は、豊かな履歴をもつ空間は、「かけがえのないもの」であるといった。そして、四国には、戦災にあわなかつた数多くの《まち》があるといった。

しかし、こうした《まち》においても、戦災復興区画整理事業ではなかったが、戦後の近代化と高度経済成長期の過程で、豊かな履歴をもつ「かけがえのない」空間も、その多くは消滅していった。だが、今回の見にも見られるように、注意深く観察すれば、「豊かな空間の履歴がうかがえる場」も数多く散見される。

四国の「地域再生」は、こうした《まち》の「豊かな空間の履歴がうかがえる場」の「再生」が、大きな柱の一つとなってよい。それを、『四国レトロ・フューチャー・シ



ティづくり』プロジェクトと名づけよう。景観法が制定されようとしている今日、こうした「地域再生」が、今、求められているといえる。

- 住民の活動に支えられ「場所の力」を利
用し空間を育む

「豊かな空間の履歴がうかがえる場」は、ヒト・モノ・コト・トキがからみあい、生活し、働くさまざまな市井の人々の生きざまが、内側からハリのある空間として存在している。そして、それらは、そこにみられる人間と空間の相互浸透性、両者のふくみあう関係性を豊かに紡ぎだす地域の活動によって、はじめて活かされる。

レトロ・フューチャー・シティづくりは、こうした地域住民の地道な活動に支えられて、はじめて成立する。そして、レトロ・フューチャー・シティづくりは、豊かな履歴をもつ空間の「場所の力」を利用しながら、時間をかけて育んでいく必要がある。

●空間の意味を再認識する市民参画

しかし、多くの場合、「空間に刻まれた履歴の価値は、そこに住み、その風景を日常のなかに組み込んでいる人々には、なかなか認識されないことが多い」と桑子(1999)は、指摘する。*3

そして、桑子（1999）は「だから、大切なことは、その空間の意味、価値を再認識するプロセスが必要となる。空間の履歴の価値を認識する活動は、女性も男性も、生活者も専門家も、市民も行政も、地域の先達のさまざまな実践と、その苦闘に関する知識を共有し、新しい問題に一緒に取りくむ

学びと創造の場である。多くの人々の知識と経験を動員する必要がある。しかも、そのような知識と経験を動員すれば、多様な意見の存在も明らかになる。の中には、対立する意見が含まれるかもしれない。しかし、対立を恐れてはいけない。意見の対立こそ、その空間が含む多様な価値の表現かもしれない。その対立の根幹を見すえて、空間のもつ価値を最大限に生かすことこそ重要である。」と語っている。^{*4}

● JUDI 四国ブロック会員の出番

四国におけるJUDI会員数は、決して多くない。しかし、各県とも優秀な民間のコンサルタントや建築家の方々がいる。『四国レトロ・フューチャー・シティづくり』には、これらの人々が連携し、豊かな履歴をもつ空間の意味、価値を再認識するプロセスに関わるコーディネーターとなることが求められている。四国JUDI会員の出番である。

(2004. 05. 12記)

- *1 桑子敏雄 1999 環境の哲学 講談社
学術文庫 p31
 - *2 ドロレス・ハイデン 後藤春彦・篠田
裕見・佐藤俊郎訳 2002 場所の力—
パブリック・ヒストリーとしての都市
景観 学芸出版社 p4-5
 - *3 桑子敏雄 1999 環境の哲学 講談社
学術文庫 p33
 - 4* 桑子敏雄 1999 環境の哲学 講談社
学術文庫 p33

内子町八日市謹製 球風印 1874年(明治7年)秋月
Nishiura Hachidai Kinsaku Kyūfūin 1874 autumn

（註）此處所說的「政治」，是政治家的「政治」，不是社會學家的「政治」。社會學家的「政治」，是社會組織的「政治」。



塞戸市吉良川町（吉良町）高野山 Higashikagawa-cho, Kiyosato, Miyakonojo City

而當它被抑制時，則會有更強的反應。這就是說，當一個細胞受到抑制時，它會更強烈地反應。



過疎集落におけるまちなみ保存と現実

島崎 佐智代
SACHIYO SHIMAZAKI
高知女子大学

●池川町椿山集落

池川町は高知市から北西に約50kmのところに位置し、清流仁淀川の支流である土居川・安居川の流れる自然豊かな町である。町の面積の約95%を森林が占めており、以前は林業が町の主産業であった。昭和30年代までは人口8,000人程度あったが、平成12年の国勢調査では人口2,432人、1,115世帯まで減少しており、65歳以上の高齢者率は45.8%という典型的な中山間地域である。

池川町役場からさらに自動車で40分ほどのところに、「椿山（つばやま）」という小さな集落がある。この集落は標高600m以上に位置し、平家の落人伝説が伝わる。平成16年4月30日現在の椿山集落の人口は21人、世帯数は14世帯であり、高齢者率は85.7%と極めて高い過疎の集落である。椿山集落では、本格的な焼畑農耕が昭和後期まで行われていたことで知られている。

●椿山集落のまちなみ

この山深い椿山集落には、独特のまちなみが保存されている。それは、急峻な山の斜面上に住宅が密集して建てられているのだが、正面から集落の全体像を捉えるのは困難なゆえに、さらにその神秘性を深めている。椿山集落を横切る道路から斜面下を見渡すと、緑色の森の中に、銀鼠色の小さな切妻屋根が重なり合うように建ちならぶ景色が広がっている。

それぞれの住宅は、敷地の奥行きを広く取ることができないため、桁方向に一列に部屋を配置している。そして住宅の前面には小さな庭があり、この庭が隣家への通路

となっている場合もある。また、急峻な斜面上にかろうじてつくった平地に住宅が建てられているため、隣り合う住宅の庇が触れるほどに密接していたり（写真1）、斜面上にある住宅の庭先には斜面下の住宅の屋根が接近していたりする（写真2）。斜面下にある住宅を結んでいるのは、狭く急傾斜な路地である。

椿山集落の住民は高齢者が多いが、ここでは「バリアフリー」の概念からほど遠い生活をしている。高齢者が生活することを考えると、住宅内外の段差をなくし、メンテナンスの簡単な建具や外壁に替え、水周りの設備を新しくするなど、バリアフリー化を進めたいところである。しかし椿山集落の多くの住宅では、そのような改築や増築をすることもなく、その独特的外観を保った状態で生活がなされている。

●「取り残された」まちなみの保存

このように椿山集落の住宅が安易な改築や増築を行わないまま現在まで残されてきたのは、意識して「保存してきた」のではなく、結果的に「取り残されていた」というのが現実だろう。昭和45年には人口が106人あった椿山集落だが、高度経済成長という時代の中で、住民は次々と集落の外へ出て行った。他の集落に比べて高齢化が急速に進んだため、そしてこの山深い地では情報や物資の行き交う機会が少なかったため、取り残されてしまったと考えられる。

部外者である私たちは、この椿山集落のまちなみを驚き感動し、この先もこのままの状態で保存していくことを願う。しか



(写真 ②)



(写真 ①)

四国再発見ツアーから四国ブロックの前望を

島 博司
HIROSHI SHIMA

し、部外者が「理想的なまちなみの保存」を訴えるのは容易なことだが、そこは住民の厳しい「現実的な社会生活の場」である。

それぞれの住宅は、安全で快適な生活ができるための空間や機能が必要である。また、それぞれの地域では、ゴミや生活排水の処理など社会基盤を整備する必要がある。それらを実現しながら、同時にまちなみの保存をすすめるのは、特に過疎地域では非常に困難な場合が多い。

四国には過疎に悩む集落が多く存在する。そのような地域にこそ、独特のまちなみが保存されて（取り残されて？）いる可能性がある。過疎の集落を維持し、そのまちなみを保存していくために、私たちに何ができるのだろうか。「理想的なまちなみの保存」と「現実的な社会生活の場」との乖離を縮めていくためには、どのような手法があるのか考えていきたい。

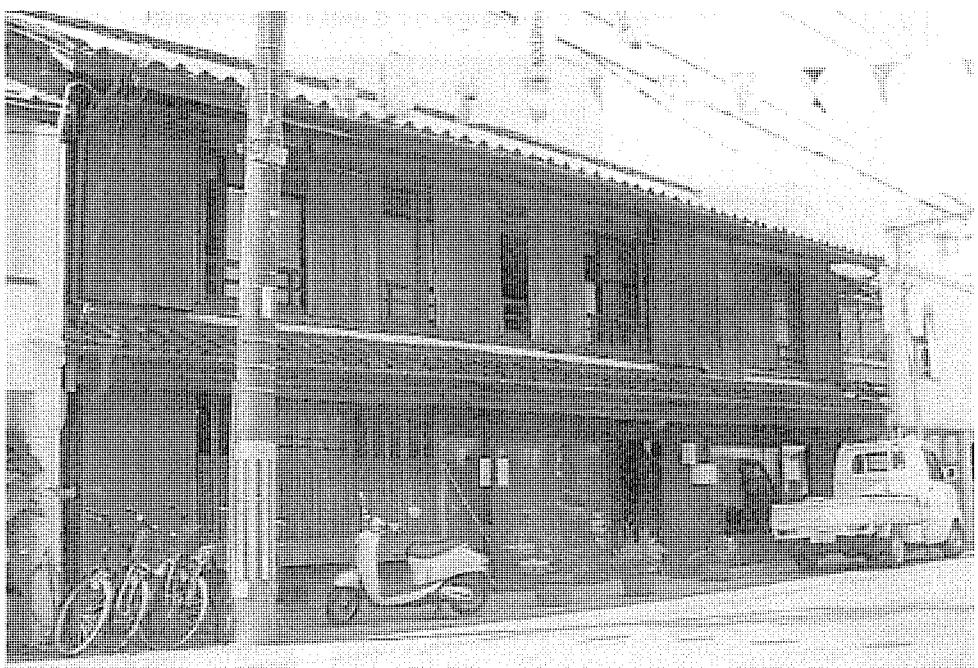
「お道を」そう静かに言って平岡先生（城川町郷土史家）は宴席を退座された。4月17日、「四国再発見環境デザインツアー」の夜、最も印象に残った言葉である。宇和地方では、旅人を送る別れの言葉として使われているが、この言葉を使う方は少なくなったと聞いている。地域固有の言葉も世代が替われば、消失していく運命にある。

四国ブロックが7年前に始めた「四国再発見ツアー」は、都市化する時代の影に残映のように残された空間を求めて、僻地の離島や山間に訪ね、小都市に出かけてきた。四国は多様である。沿岸の漁村も山村も全てを訪れるることは多分できない。ツアーでこれまで出会った人々との出会いは、楽しいことばかりである。しかし、その背後に潜む厳しい現実の動きは、小さな「茶堂」の保存にも現れている。過疎と高齢

化の波はかつてないほど、集落に押し寄せている。希望の灯りは誰が点し続けるかにかかっている。

●小規模群体の保存と再生

私たちは、何をつくってきたのか。私たちは、田園に鎮座する茶堂をつくれない。西海町の漁村集落の石垣もつくれない。山上の社のお祭りもつくれない。小さな山城の石垣もつくれない。目立たない小さなものほど、余計に残せない。私たちは、地域でそのように残る真の意味を知らない。地域で居住していない限りその意味を体感することも殆どないと言っていい。私たちは、どのような感応力（地域の価値を感じるセンサー）を持とうとしているのだろうか。そう思うことがツアーに出かけるといつも想いが馳せていく。



勿論、内子も脇町も素晴らしい、その活動の軌跡は今でも四国のまちづくりに多様な刺激を与え続けている。その活動者が生き続ける限り学び続けてもいるだろうと思う。内子は、伝統的町並みを包む周囲の山村の再生を「町並みから村並みへ」と表した。視野の奥行きが相當に変化しつつあるように思う。一つの町に仕事であろうとなかろうと係わり続けて、一定の成果を浮上させるのは、なかなかの事ではある。しかし、地域の小さな価値を見抜く視野を持ち続けることは必要である。

●小松島民家再生こと始め

昨年の春、地元住民から15年も空き家になっている民家（大正時代の商家、約100坪）の保存活用の相談を「とくしまNPO連絡会議」（県内38団体加盟）の事務局の僕に持ちかけられた。かつては、大阪・和歌山へ行く港町として栄えた商店街の中にあるその民家は、文化財ほどの価値は全く無いと建築家に指摘されたが、相當に朽ちてきていた商家を借りることにした。まともに修復すれば2千万はかかると言われた。全く金はないので、ともかく、若者10数人を含む有志だけで黙って修復作業始めてから10ヶ月がたつ。

倒れかかった土壁の倉庫を壊して大量の廃棄物の処分に困っていたら、近所の文房具さんが廃棄物処分場に掛け合ってくれた。斜め向かいの小さな喫茶店を経営する老人が昔の写真集を貸してくれた。玄関に花鉢を数個おいている。時々、水をやってくれているのはこの方かも知れない。裏庭に面する一人暮らしの高齢者が作業の合間に時々、顔をだして、手づくりのアマゴの寿司をくれたりする。何とか玄関も直し、畳もはりかえたが、建具が一つもないで困っていたら、近所の家具屋さんが昔の建具を保存していて明治や大正時代の建具をくれた。雪見障子もあったのだ。寸法の合わない建具だけれど、上下を切れば調整可



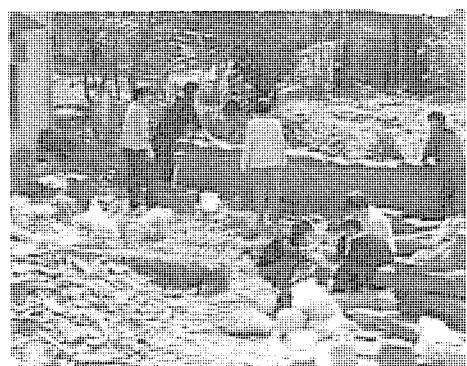
能で建具屋さんと相談開始中、60坪の庭も修復を始めた。毎週、土日の殆どをこの作業にあてている。自治体にも商工会議所にも、相談はしていない。補助金をもらうつもりもない。自力で黙々と始めることが肝心。町屋カフェをしてみたいと若い夫婦が現れている。知的障害者の団体がギャラリーで展示販売できないかと相談がある。作業でいつも手伝ってくれている若者がここで暮らしてみたいと言い出してもいる。どのようにするか、こっちは全く決めていない。やりたい人が相談して決めて、と今は言っている。

大学で講義を聞くよりもここで作業する方が充実感があると作業に加わっている若者が言う。その若者達は、屋根を修復するのに残った昔の瓦を使って土塀を庭に作った。誰も専門的な指導はない、勝手に作り始めたのをほおっておいたら、ちょっとした風景ができてしまった。どこかで情報が流れてNHKの取材があって、土塀をつくった若者はインタビューで「この町はきっと元気になる」と宣言した。

●地域で深く呼吸するために一四国ブロックの前望一

四国ブロックの再発見ツアーは、観ていない四国を観るために、ブロック会員の親睦を兼ねて始めた。これまで続いているは、そこに得難いものを感じているのだと思う。学んだと思っている技術や理屈や経験を超えて、そこにあるものから「感知する創造力」を鍛えてくれる。多分、小松島の民家の庭は、四国の山村の風景が投影されるかも知れない。そのうち、城川町の山上の祭りのように、近所の人々が庭に集まってるかも知れない。

少人数の四国ブロックのメンバーには、NPOの活動に参画するものが増えている。テーマを持って地域に密着することが価値あるものとして活動する四国ブロックの会員がいる。そのようなブロックの専門



家を支援する機能を持たなければ、或いは、朽ち果てようとする集落の素晴らしい田園の資産を保全するための支援を持たなければ、四国のブロックは多分、衰退する。N P O 法人化を視野にいれて、その議論をしたいと思う。

生きられた地域の豊かな空間は、私たちだけの世代が所有者ではない。より良きも

のを良く保ち、発展させ、望むべくは改良して私たちの後にくるべき世代に渡せという、暗黙の義務があるのかも知れない。そのために、地域で深く呼吸できるブロック活動をつくることが必要である。そろそろ具体的なミッションを持つてもいいのだと思う。

■第14期定例総会

鳥越けい子

TORIGOE KEIKO

代表幹事 聖心女子大学服部

都市環境デザイン会議第14期定例総会

日時： 2004年7月17日（土）12時30分～13時50分

場所： 東京大学・弥生講堂

代表幹事の杉山朗子氏の司会により、都市環境デザイン第14期定例総会の開催が告げられ、続いて議長に代表幹事の柳田良造氏、書記に代表幹事の鳥越けい子が選出された。また、署名記録人に伊藤洋氏、山名清郷氏が選出され、議事に入った。

1) 第13期活動報告

代表幹事の中井川正道氏より、第13期の活動が報告された。

●プロックの新設と会員数について

第13期も会員数が減少するなか、琉球ブロックが新設され、「今年に限り入会預かり金は免除」のキャンペーンを実施し、ある程度の効果があった。

●活動概況

昨年度に引き続き、公募制プロジェクトも実施し、明日その報告がある。企画提案数はまだ少ない。事業委員会の永年の労作である「日本の都市環境デザイン」3部が出版されたので、会員に販売協力を要請したい。

●代表幹事会の活動

代表幹事会は、下半期には昨年度に続き、代表幹事会と各委員会との関係強化に努め、終盤では、今後の委員会活動の在り方を重点的に検討した。

2) 委員会報告

●広報出版委員会の沢木俊介氏より、第13期のJUDIニュースについて、第12期の共通テーマ「人と場の活性化」を引継ぎつつ、各地で進められている地道な活動を取り上げた。また、新コーナー「スペイシースペース」を設け、リレー方式による連載コラムを開始したとの報告があった。

●研修研究委員会の松本篤氏からは、委員

会の主な活動は、会員むけ、自治体むけ、学生むけ、若手むけの4本立との説明があつた後、13期は、udcの協力で「都市環境デザイン特別講習会」を開催。学生向けセミナーは第12期からずれ込み、第13期の冒頭に東大弥生講堂にて実施。押しかけリレーセミナーは13期で7回、14期で1回を既に実施。特定のテーマに絞った連続セミナーは、ITSの取組に関する企業の取組を紹介する内容で行つたとの報告があつた。また現在実施しているのは「研修活動」のみで「研究活動」がないため、14期には委員会活動の内容を見直していきたい。押しかけセミナーは、通算7回目のセミナー開催をもつて、3年間にわたる試行を終了し、14期からは地方での開催をめざし、各地方ブロックとの調整を図りたいとの報告があつた。

●事業委員会の中野恒明氏からは、13期には「都市環境デザインガイドブック」を編集出版したが、これに関連して「買取保証金の積立て」が発生したこと。これまでモニターメッセは100万の収益があつたが、13期はそれがならなかつたとの報告があつた。

●国際委員会委員の服部圭郎氏からは、13期には東京と名古屋で、「コンパクトシティー環境共生と持続可能な都市」をテーマに、また東京でイギリスより講師を招き、国際セミナーを開催した。国際セミナー記録集を出版。海外交流計画として「上海・江南地方」へのツアーを実施。14期は、引き続き国際セミナーを開催し、海外交流計画としてはシンガポール、マレーシアへのツアーを予定しているとの報告があつた。

●JUDI賞委員会の中井川正道氏からは、13期の活動は休止状態で予算は未消化。14期は一旦、解散して、組織内容共々、代表幹事マターで見直し検討したいとの報告があつた。

●活性化委員会の天野光一委員からは、公募制プロジェクトを創設し、13期には2

件のプロジェクトが認定・実施し、委員会活動については、「予算消化型」の活動とならないよう、活動にみあつた予算配分・執行の方式へと変更したこと。14期は、総会への参加率向上と会員間交流促進のための「会員による発表会」企画を提案し、JUDI賞についても、この発表会における発表者を表彰していく方向で JUDI賞委員会と調整を図っていること。また各委員会と代表幹事会の風通しをよくするための対策を検討中等、全体の活性化を図りたいとの報告があった。

3) ブロック報告

- 北海道ブロックの酒本宏氏より、13期は JUDI サロン（講師は土田旭氏）、シンポジウム（講師は斎藤裕氏）を各 1 回開催。2月に「日本の都市環境デザイン」をテーマに、ミニシンポジウムを開催。コミュニティ FM で「まちづくりサロン」を 11 月より開始したこと。また 14 期は、JUDI サロンを 8 月 2 日スタートで 4 回ほど開催。学生セミナーの開催も予定しており、ラジオのほうも継続し、JUDI から情報を発信していきたいとの報告があった。
- 東北ブロックの斎藤浩治氏からは、13 期は 5 月に、「元気なまち盛岡」を実現する地域再生フォーラムを実施。公募プロジェクト「長井ランタンマーケット」にほとんどのエネルギーを費やした。14 期は、研修会企画「まちづくりフォーラム」と、「まちなか遺産の活用事例研究」を継続して実施する予定との報告があった。
- 北陸ブロックの谷明彦氏からは、13 期は 2 月に石川で、ブロック総会および発表会、および公開フォーラムを開催。14 期はブロック活動活性化のために、公募制プロジェクトへの応募も検討中との報告があった。
- 関東ブロックの高見公雄氏からは、13 期はブロック活動活性化に向け、前年度に開始した電子メールによるブロック・レター、キャラバンと一言サロンの各シリーズを継続的に実施。準会員、学生会員は増えていて、若者ネットワークが形成されつつあること。14 期は、13 期の活動を継続すると共に、「美しい街づくり法制等検討委員会」活動へ参加予定。「美しい街ランキング」の公募制プロジェクトへの応募も検討中との報告があった。
- 中部ブロックの繁野舜氏からは、13 期は大学（名古屋大学・愛知産業大学）とのネットワークづくりを行うと共に、ITS

世界会議にも参加した。13 期予算はほぼ全額を 14 期への積立金とした。14 期は、引き続き産学で JUDI 懇親会をつくるなど、大学との交流をすすめつつ、「デザインセミナー」を浜名湖花博と愛知万博で開催したい。中部ブロックらしい視点を見つけながら、街角資源の発見を行う。ITS 世界会議が名古屋で開かれるので中部ブロックとして参加し、シンポジウムを開催する予定との報告があった。

- 関西ブロックの堀口浩司氏からは、13 期は「都市環境デザインセミナー」を 9 回、第 12 回都市環境デザインフォーラム・関西を開催。韓国慶州・大邱で海外セミナーを実施し、「都市環境デザインフォーラム・大邱」を共同開催。道頓堀提案のパネル・模型の開催その他の新事業に取り組んだ。14 期は、都市環境デザインセミナーを 10 回程度、第 13 回都市環境デザインフォーラム・関西の開催を予定との報告があった。
- 中国ブロックの杵村優一郎氏からは、13 期は例会を 2 回開催。14 期はブロック総会および例会を 5 回予定しているとの報告があった。
- 四国ブロックの本田寿氏からは、13 期は丸亀市で、都市景観シンポジウム「市民がつくる城下町の暮らしの景観」を丸亀市と共催。酢四国景観デザイン紀行の原稿編集と宇和島市でのデザイン紀行実施。14 期は、13 期の活動を引き続き実施する計画との報告があった。
- 九州ブロックの福田忠昭氏からは、13 期は総会及び定例会、交流研究会、研究報告会を開催。14 期も、13 期の活動を引き続き実施すると共に、会員間相互の情報交流を促進するため、デザイナーズリストの作成等を計画中との報告があった。
- 琉球ブロックの石嶺一氏からは、13 期に新ブロックとして発足し、基本的な活動は月 1 回の定例会。「琉球の美」をテーマに公募制プロジェクトに応募し、これをブロックのライフワークと位置付けた。第 19 回公共の色彩賞へ「首里城の赤」を応募。環境色彩 10 選に入った。14 期は、公募制プロジェクトに引き続き応募し、研究内容を発展・深化させ、定例会も月 1、5 回ほどにして、沖縄で JUDI の存在をアピールしたいとの報告があった。

4) 13 期活動収支監査報告

代表幹事の中井川正道氏より、13 期の一般会計部門と特別会計部門の収支報告が

あった。質問は特になく、続いて監査役の成瀬恵宏氏と大塚守康氏よりの監査報告があつた。

「適性に処理されており、基本的に問題ないが、積立金、繰越金は予算の10パーセント内にとどめ、それ以上であれば積立金とし、さもなければ本部に戻してほしい。仮払いについては、短期ならよいが、年度を繰り越すのはやめてほしい。会費の未納問題については今後の代表幹事会の議題としてほしい。」

5) 14期の活動方針と収支計画

代表幹事の中井川正道氏より14期の活動方針について、代表幹事会と委員会の

連携強化を継続しつつ、「景観緑三法」の法制化を受け、この時代的要請にJUDIが社会をリードできるよう、魅力的で健全な組織づくりをめざしたい。活動計画の「会員活動の活性化」としては、会員の顔が見えるようにして、魅力ある会にしていきたい。「企業サービス」についても真剣に取り組んでいきたい。慣例化した行事内容を見直し、無駄な経費の節減にも取り組みたいとの報告があつた。また同氏より収支計画書の説明があり、質問や意見は特になく、承認された。

最後に司会の杉山朗子氏より、午後からの予定と明日の予定が報告され、第14期都市環境デザイン会議総会は閉会した。

■国際委員会報告

服部 圭郎

HATTORI KEIROU

明治学院大学

第16回 JUDI国際セミナー「海外コンペティション入選者に聞く」

5月20日に第16回JUDI国際セミナー「海外コンペティション入選者に聞く」が工学院大学11階第5会議室にて開催された。これは、最近海外コンペティションに入賞された方々に、現在進行中の世界都市環境デザインに対するお考えを伺うのと同時に、入賞されたコンペの概要、海外業務における留意点、そして1位入選の秘訣までを含め、スライドを交え各プロジェクトの重要なポイントを語っていただき、発表者と参加者と活発な意見交換をすることを目的とした。発表者は、慶應大学環境情報学部教授の石川幹子氏、八木造景研究室代表の八木健一氏、株式会社日本ランドデザイン取締役の横松宗治氏であった。

石川幹子氏には、「EU環境基金にもとづくガヴィア公園設計」という世界各国の約10名の建築家、ランドスケープ・アーキテクトに対する指名コンペにおいて、指名を受けた伊東豊雄氏の伊東事務所と慶應義塾大学石川研究室がジョイントで応募し、満場一致で1位となったコンペの概要について話をしていただいた。

ガヴィア公園はマドリッドの南にある残土捨て場で、緑のインフラ、水のインフラをつくろう、というのがコンペの趣旨であった。コンペは強力なメッセージを出さないとどうにもならない、という考え方のもと石川氏のチームは「循環とエコロジー」の案を提出した。この案が採択された大きな要因であると考えられる。具体的には、水の木を植えた。20世紀は建築の木を植えた。21世紀は環境の木を植えていくこうというのが、そのアイデアであった。

ランドスケープというのは、ユートピアという思想があつたりする。機能の時代にはファンクションを入れる。それらに対し、石川氏達は、その場所が存在

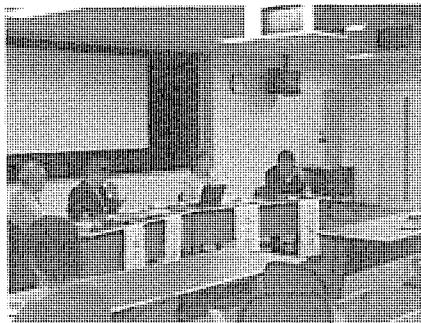
する理由、場所の必然をつくる、ことを提案した。しかも空間そのものが循環、生物多様性、といった新しい公園をつくろうとしたのである。今、基本設計が終わり、実施設計に取り組んでいる状態だそうで、森をつくるという事業なので10年くらいかかるというお話をあつた。

八木健一氏には「大連市オリンピック広場改修設計」という大連市の中心部にある「オリンピック広場(約5ha)」の全面改修計画の設計コンペについての話をしていた。これは、大連市西崗区政府が主催した指名コンペであり、中国で仕事をしている外国の事務所が選定されたものである。

敷地内の地下にショッピングセンターがあるため、基本的には人工地盤上の計画であり、地下施設への出入り口などの位置変更が不可能で、制約条件が厳しい内容であった。このコンペは正式には、まだ契約されていない。中国では最終的に市長が決済しないとお金が出ない場合が多いそうである。一等だと言われていろいろと仕事をしていたのだが、まだお金が来てないなどの裏の話を多くしていただいた。

横松宗治氏には、「台湾新竹生物医学園区計画」コンペについてのお話をしていた。このコンペは2度に渡って実施されたのだが、横松氏は2度とも1位を獲得した。第一段階(2002年~03年)は、台湾大学付属病院を核として、民間研究基本機関を誘致し、新たに生物医学の産業を起こすためのソフト、ハード両面の基本構想であり、第2段階(2003年~04年)は園区全体の基本計画であった。付属病院は基本設計まで実施し、また民間事業者の参入条件を整えた。

コンペのサイトは、台北から1時間ほどのところの新竹から、10キロくらい離れた場所にある。このコンペの背景には、台湾において医療産業を興すための中核施設づくりという大目標がある。2008年に完成させようとする計画である。敷地面積は



38ヘクタール。生物医学産業を引っ張るので大型の病院をつくったりするという内容であった。非常に大きな仕事なので、組織の調整といった問題に大きな時間を費やしている、というのが実態であるなどの、コンペに入賞した後の実施面での体験話などをしていただいた。

3方の発表後には、国際委員の倉田直道氏を司会に、会場との闇達な質疑応答が行われた。文化、風土が異なる中でのプロジェクト提案の難しさなどに関しては、八木氏はむしろ「クライアントからそういう歴史や文化を考えないでくれ」と言われて戸惑った経験などのお話をいただいた。石川氏は、「どんな時でもその場所の文脈を読み取って設計することの重要性を主張した。

また、国際コンペでの契約の難しさ、地元の専門家とのコラボレーションの方法などの質問がなされ、それぞれ発表者は経験を踏まえた実践的に役立つ意見を述べてくれた。

最後には多く出席していた学生に対してのメッセージをいただいた。石川氏は「ランドスケープのマーケットもよく分からぬいし暗いかもしれないが、その分野が暗い、と思うと暗くなってしまうので、どうやつたら道が開けるのかな、と前向きに考えることが重要であり、暗いかそう思わないかは自分次第。自分の大切な人生なので、頑張るかということが重要です」と述べた。八木氏は、「若いうちには勉強のためにコンペをやればいいと思っている。一等と比較できる。同じ条件でやって、自分と入賞案とどの程度差があるかを知るのはとても勉強になると思う」と述べた。横山氏は「今の若い学生さんとかは勉強していると思います。しかし、コンペとかを実施する時に徹底して何かやるというが必要だと思います。モノを調べるということ、これがコンペをやる時にメリットだと思います」と述べた。

■研修研究委員会 報告

松本 篤
MATSUMOTO ATSUSHI
アトリエ H.O.R

押しかけリレーセミナー第7回報告

林泰義先生『新しい公共』とまちのデザイン
日時：平成16年6月10日（木）18:15～
場所：（株）計画技術研究所

押しかけセミナー第7回は、計画技術研究所で林泰義先生をかこんで6月10日に開催されました。14名の参加者は実務に携る方と学生とが同数でした。まずそれぞれの参加者が聞きたい、話したいことを記したポストイットを使って自己紹介をし、林先生が議題を模造紙に整理されるという、先生ならではの「参加型」でセミナーが始まりました。参加者からは、例えば実務にそっては、現在進行している具体的な案件を背景として、住民参加の手法、有効性への疑問、参加によるデザインの合意形成の困難さ、本来の住民参加やNPO活動と現実との隔たりから、例えば指定管理者制度の矛盾や参照可能な海外の市民活動について、あるいは構想から実現へ過程での行政とのやり取りは美しい景観がうまれる方向に向いていないのではなく、などの話題が出されました。学生からは研究に即して、住民活動から生み出された環境をどのようにして社会に位置づけるか、参加者が限られる住民参加での合意の有効性、紛争に際してまちづくりNPOや専門家の果たす役割、個人の思い、住みたい環境を実現していく手立てについて、などがあげられました。

これらを受け、林先生は用意されたパワーポイントを使わず、白板を使い、身近な

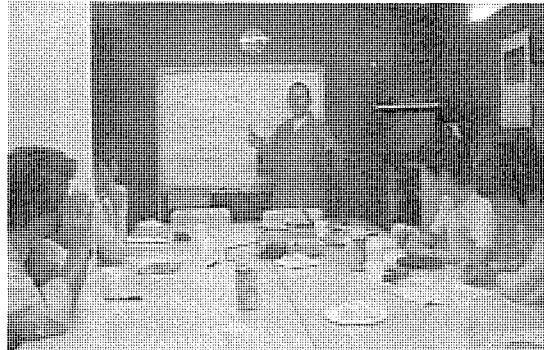
事例やTV番組なども取り上げながら、参加を軸に専門家、行政、企業、住民の関係を模式的に図示され、問題の位置づけと普遍性を解き明かしていかれました。＜参加と専門家＞では、皆がぼんやりと思い描いていることを上手く言い当て表現するデザイナーの役割について、＜参加と住民＞では、自由に意見が出せる場を作り出すファシリテーター、今行っていることの意味を解き明かす、新たな役割としての意味づけ者の役割について、そして行政の従来からの垂直的な構造ではなく、望ましい新たな水平的な関係性として、こうした専門家や行政、住民やNPOが対等の関係でお互いを発見し、個別の問題をつなげることで、身近な問題として取り上げた「小さな公（こう）」を広がりのある公に育てるしくみの大切さ、こうしたしくみの中では参加により多様性は増すが、計画やデザインの質が下がることはない、ここでの「公（こう）」は、抱え込んだ手を開くことに由來したもので、新しい公共を意味する、一方で「公（おおやけ）」は長が住む家を語源とし、中央集権型の官僚制度によるタテ型の旧い公共を支えてきたことなどを説明されました。参加者からは、自らが関わるさまざまな事例、あるいは古くからある事例を引き合いにさまざまなエピソードが語られ、活発な議論の中で、公（こう）はすぐれて現在の問題でありながら、同時に古くから志のあるすぐれた人材によって支えられてきたことなどにも話が及びました。

個人が大切に思うことを二人で話し合うことからパブリックが始まる。ネットワー

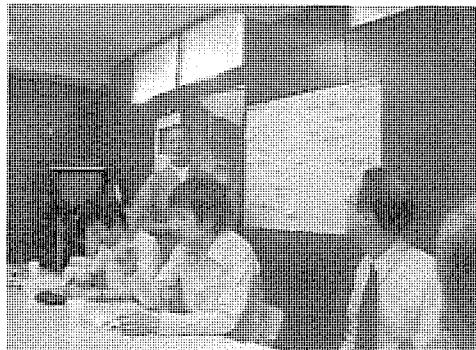
クを組んで住民が動こう、世界から情報を集め、地域のつながりを壊す制度や計画に対抗する会を「押しつけセミナーの会」として本日の参加者で立ち上げることをワークショップの成果としてセミナーは終了しました。

研修・研究委員会が主催してまいりました押しかけリレーセミナーは今回でひとま

す終了いたします。ランドスケープデザイン、照明デザイン、色彩計画、サインやストリートファニチャー、都市計画、アーバンデザイン、そしてまちづくりと第一線の先生方の仕事場で繰り広げられた濃密なセミナーはJUDIならではの得がたい場と時間でした。ご協力、参加いただきました皆様に改めて御礼申し上げます。今後の新たな企画にご期待ください。



林先生の話を熱心に聴取する参加者



参加型セミナーの様子

事務局より

1. 新会員の紹介

2004年3月1日～4月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

4月30日現在の会員数は、490名です。

正会員氏名	勤務先(プロック)
前原 信達	(株)都市科学政策研究所(琉球)
岡田 雅代	おかだプランニングラボ(関東)
安藤 徹哉	琉球大学工学部(琉球)
阪井 暖子	Planning & Produce Studio SAI(琉球)

学生会員	学校名(プロック)
佐藤 勇輔	日本大学大学院(関東)

2. 退会者(2004年3～4月)

上原宏一、漆崎忍、延藤安弘、後藤太一、藤井敏信、村上祥司、山田伸次、山田友三(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
荒川 俊介	(株)アルティップ 〒151-0064 渋谷区上原2-5-9-30 Tel. 03-3468-1170 Fax. 3468-1407
上野 泰	ウエノデザイン 〒176-0022 練馬区向山3-23-7 Tel. & Fax. 03-3999-4431
江川 直樹	関西大学工学部建築学科 〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 Tel. & Fax. 06-6368-0893
尾辻 信宣	Glocal Vision 〒891-0143 鹿児島市和田2-37-1 Tel. & Fax. 099-269-0701
九後 順子	阪急電鉄(株)都市交通計画部 〒530-8389 大阪市北区芝田1-16-1 Tel. 06-6373-5397 Fax. 6373-5680
小浪 博英	東京女学館大学国際教養学部 〒194-0004 町田市鶴間1105 Tel. & Fax. 042-796-9231
白濱 力	(有)グラフィス環境計画 〒225-0023 横浜市青葉区大場町379-27 Tel. 045-978-5412 Fax. 978-5413
菅 孝能	(株)山手総合計画研究所 〒231-0007 横浜市中区弁天通3-48 県住宅供給公社弁天通3丁目第2共同ビル2F Tel&Faxは変更なし
藤崎 浩治	風景保全研究会 〒564-0051 吹田市豊津町10-7-1007 Tel. 06-6190-2917 Fax. 6190-2918
吉田 八郎	アイエルビー(株) 〒113-0034 文京区湯島2-29-3 湯島太田ビル2F Tel&Faxは変更なし